

死刑制度は  
いらぬ

## 人は無抵抗の人を絶対に殺すべきではない

森 達也

面会室のスペースは畳にすれば3枚ほど。中央を透明なアクリル板で区切られていて、こちら側にはパイプ椅子が3つ置かれている。腰を下ろすと同時にアクリル板の向こう側の扉が開いた。年配の刑務官とともに入室してきた植松聖は、立ち上がりかけた僕と視線が合うと同時に小さく頭を下げた。

写真や報道からは何となく手足が長くて大柄な男をイメージしていたけれど、現れた植松は思っていたよりもずっと小柄だった。右手の小指には包帯が厚ぼったく巻かれている。初公判のときに噛み切ろうとした小指だ。

「森さん。初めまして」と先に言ったのは植松だった。「お忙しいのにありがとうございます」と礼の言葉が続いた。立ち上がった僕も、「面会を了解してくれてありがとうございます」と頭を下げた。

この段階で植松は死刑囚ではない。でも死刑判決が出ることはほぼ既定事項だ。死刑囚は狂暴で冷酷。多くの人はそう思っている。そう思うほうが善と悪をすっきりと二分で

きて楽なのだ。そしてメディアは、社会的欲望に合わせて報道する。わかりやすい事例はオウム報道だ。当時のオウム信者について、多くのメディアは狂暴で冷酷で危険な集団であるという前提を置きながら報道した。

地下鉄サリン事件後にオウム施設に入ってテレビドキュメンタリーの撮影を始めた僕は、普通以上に穏やかで優しく善良な信者たちを目撃した。多くの施設を訪ねたけれど例外は一人もない。ただし、その穏やかで優しく善良な集団が、不特定多数の人たちを殺害しようとしたことも確かな事実だ。

だからこそ邪悪で狂暴だからサリンを撒いたという単純な構図に事件を押し込めるのではなく、これほどに善良な人たちがこれほどに凶悪な事件を起こした理由とメカニズムを、社会とメディアは考察しなくてはならない。そんなことを考えながら撮影を続けていたとき、この時期に所属していた番組制作会社の制作部長に呼び出され、何度かの議論の末に撮影中止を言い渡された。



## 『大逆事件』

岡村幸宣

1911年1月18日、明治天皇暗殺謀議があったという理由で、幸徳秋水ら24名に死刑判決が下されました。いわゆる「大逆事件」と呼ばれるこの事件は、1週間後の1月24日に幸徳秋水、大石誠之助、内山愚童ら11名、翌25日に菅野スガが処刑されるという、当時としても異例の早さで幕が下されました。

丸木位里、丸木俊は1989年に、足尾鋳毒事件の連作とともに、「前々から何とか描かねばならぬと思っていた」『大逆事件』を共同制作で描いています。幸徳秋水は名文家として知られ、足尾鋳毒問題を田中正造が明治天皇に直訴した際には、その直訴状を起草しました。『大逆事件』が『足尾鋳毒の図』に関連して描かれたことには、こうした連想もあつたようです。

（おかもら・ゆきのり／原爆の図丸木美術館学芸員・専務理事）

こうしてテレビドキュメンタリーとして撮影が始まった『A』は、オウムを徹底した悪として描こうとしていないとの理由でテレビから排除されて、撮影が終わるころには（消去法で）自主制作映画になっていた。

オウムだけではない。その後も僕は、多くの死刑囚に会った。いま目の前にいる植松も含めて、みんな普通の人たちだ。でも同時に、その普通の人たちが人を殺めたことも確かだ。だから混乱する。善悪の基準がわからなくなる。善悪二元が体現するわかりやすい構図に押し込めたくなる。

テレビでは今、日本の高校生たちがロシア大使館の前に集まって抗議の声をあげている、とのニュースを伝えている。SNSにアップされたロシア軍ヘリが撃墜される動画には、何十万の日本人が「いいね」をクリックしている。

まずは大前提。一方的に武力侵攻を始めたロシアに理はない。世界中から批判されて当然だ。今すぐにでも撤退すべきだ。でも遠く離れた日本に暮らす僕たちにとって、ヘリに乗っていたロシア軍兵士が殺害されることは「いいね」なのか。その兵士にも父や母はいた。妻や子がいたかもしれない。一人ひとりとは変わらない。その想像力が消えている。ロシアやウクライナだけではない。ルワンダやクメール・ルージュの虐殺、文化大革命や旧ソ連の大粛清、南京虐殺や関東大震災時の在日朝鮮人虐殺、ハンナ・アーレントによって凡庸な悪と規定されたアイヒマンが体現するホロコーストも含めて、ほとんどの戦争や虐殺は、閉ざされた組織内で自衛意識が高まることでメカニズムが発動する。

ヒトは群れる生きものだ。一人では生きられない。まずは家族。そしてご近所や村や町、学校に会社、様々な共同体に帰属する。群れは同質性を求める。つまり同調圧力。同じ肌や目の色。同じ言語。同じ宗教。同じイデオロギ。多数派に合わない少数派は迫害される。これが群

れの副作用だ。そして国家を基盤とするナシヨナリズムは、社会に数多く存在する群れの最終形態だ。強い不安や恐怖にさらされたとき、今も昔もヒトは集団化を発動する。

ジョン・レノンが国なんか存在しない世界を想像しようとしてから40年以上が過ぎて、ネットを媒介にしたグローバルシヨンはこれほどに進展した。EU域内では通貨は統一されて出入国も自由にできるし、ウイリスの脅威の前には国境など何の意味もないと世界中の人たちが実感したはずなのに、国境を前提とした争いは今も世界中で続いている。17世紀に誕生した主権国家の枠組みは今も変わらない。いやむしろ激化している。

こうして人は善良で優しいままで人を殺す。戦争や虐殺だけではない。もちろん、だからといって罪は軽減できない。法に背いた人に対しては、司法の手続きは規定どおりに行なわれるべきだ。でも悪を断罪しながらも安易な善悪二元化に身を任せるのではなく、人は優しく善良なままで人を殺すことができるといふ事実を、しっかりと認識しなくてはならない。これを認めることはつらい。なぜなら自分と犯罪者の境界が曖昧になるからだ。でもそれは現実だ。

面会時間が終わるころ、小指の具合はど

うかと（同席していた）編集者から質問された植松は、ふいに右手の小指にキヤップのように被せていた包帯を外した。欠損した小指の根元が現れた。傷口は赤黒く変色している。同時に横で会話を記録していた刑務官が立ち上がり、植松の右手を強く掴んだ。

すべては一瞬だった。刑務官に右手を掴まれた植松は、予期していたのか抵抗するような素振りにはまったく見せないまま、左手で外したばかりの包帯（のキヤップ）を、右手の小指の欠損の上に素早く戻す。それを目視した刑務官は、掴んだ植松の右手を放して椅子に戻る。2人とも無言だ。まるで儀式のように。

初公判で起訴内容を認めたあと、「皆さまに深くおわびします」と発言して頭を下げると同時に、植松は右手の小指の第二関節から上を噛み切ろうとした。この日のテレビニュースや翌日の新聞などでは、識者や被害者家族など多くの人が、裁判遅延や心神喪失を強調するためのパフォーマンスだとして植松を批判した。つまり小指を噛み切ろうとするほどに精神が錯乱している演技をした、との解釈だ。

パフォーマンスならばオーディエンスが必要だ。ところが刑務官たちに手足を拘束されて法廷から拘置所に戻された植松は、すぐに小指の傷口を治療されたが翌朝6時に、

今度は小指の第二ではなく第一関節から上を噛みちぎっている。ここにオーディエンスはいない。たった一人だ。ただし部屋は独房だが24時間体制の監視カメラが設置されているから、不審な動きをすればすぐに刑務官たちが駆けつけてくる。前日に手当てを受けた包帯やガーゼなどを外す仕事を始めてから噛みちぎるまでには、長くても数分で終えなければならぬ。

第二から第一関節に箇所を変更した理由を植松は、第二関節が予想以上に硬くて噛み切れなかつたので第一関節にしたとメディア関係者に答えている。初志は曲げない。とにかく何が何でも噛みちぎる。その強い意図を感じる。

それほどに小指を噛み切らねばならなかつた理由を植松は、謝罪の意味を表したかつたから、と複数のメディア関係者に説明している。もちろんこの理由は、（多くの人が言うように）あまりにも自分本位での外れだと僕も思う。それは前提にしながらも、指を数分で噛みちぎる自分を、あなたは想像できるだろうか。僕は想像した。とてもじゃないが無理だ。皮膚や薄い肉に歯を立てることくらいはできたとしても、関節に当たって歯が止まる。そこで深呼吸して、思いきり顎に力を入れて関節をゴリゴリと噛み砕く。……やっぱり無理だ。関節まで歯が届く前に、痛さ



で悶絶して試みを放棄していると思う。でも植松は実行した。歯だけで噛みちぎった。これを意志の強さだけで説明できるだろうか。過剰すぎる。強さではない。何かが逸脱している。あるいは何かが欠落している。

この時期（から今に至るまで）の植松は、事件当時の被告人は心神喪失状態で責任能力はなかったと主張する弁護士に対して激しく反発し、自分には責任能力はあると何度も明言していた。方針を変えない弁護士を解任することまで一時は考えていた。つまり精神錯乱を装うために小指を噛み切るというパフォーマンスを演じた、との解釈には、相当に無理がある。

自分を彼の立場に置き換えれば、普通の精神状態にあることには、やはり相応な無理があると思うのだ。しかし（死刑逃れのパフォーマンスなどの見方が示すように）社会とメディアはこの視点を回避する。多くの記事を読んだが、事実関係以上には踏み込まないという姿勢はほぼ共通していた。だから司法も同調する。植松は正常であることが前提なのだ。死刑にするために。

2006年12月25日、七十七歳と七十五歳の老人を含む4人の死刑囚が処刑された。なぜクリスマスに執行したかといえは、執行ゼロの年という実績を残さなためだったと言われている。確かに年度末の道路工事の

多さなどを引き合いに出すまでもなく、日本の官公庁は実績ゼロの年を残すことを嫌がる。予算を削られる可能性があるからだ。

でも人の命はU字溝やアスファルトとは違う。確かに死刑囚ではあるけれど、そんな事情で執行されてよいのだろうか。執行された4人のうち3人は再審請求を続けていた。つまり冤罪の可能性があった。でもこの執行は、すべてを断ち切った。その後も長瀬法相（当時）は執行命令書に署名を続け、在任中に10名が処刑されている。

1991年からの5年間で2001年からの5年間で比べれば、地方裁判所の死刑判決は3倍に増加した。厳罰化を求める世相が刑事司法を変えつつある。ターニングポイントには1995年に発生した地下鉄サリン事件だ。だから執行が追いつかない。

この厳罰化の前提にあるものは、治安が悪化しているとの共通認識だ。確かにメディアは、凶悪な事件が増えていると強調する。政治家も二言目には治安悪化への憂慮を口にする。本紙の読者にも、「物騒な世の中になった」と思っている人は多いはずだ。

でもそれは事実ではない。

戦後の統計において殺人事件が最も多かったのは1950年から55年にかけての5年間で、ここ数年はこの時期の半分以下の件数で推移している。つまり治安は悪化してい

ない。いや悪化していないどころか、殺人事件数はほぼ毎年、前年より減少している。

現在の日本において人が不慮に死ぬ年間の統計は、交通事故が12000人で、水難事故による死者は年間1000人あまり、そして殺人事件の被害者数は600人台だ。つまり殺人事件の被害にあう確率よりも、水難事故によって死ぬ確率のほうがはるかに高いのだ。でもほとんどの人はそうは思っていない（たぶんあなたも）。

データを見ればすぐにわかること。でも多くのメディアは危機や不安を煽る。そのほうが視聴率や部数が伸びるからだ。その帰結として厳罰意識が高まり、死刑判決は急激に増加する。

2021年1月、中央アジア・カザフスタンは死刑廃止条約を批准した。これで旧ソ連諸国において死刑を残すのは、20年以上執行していない実質的な廃止国であるロシアを別にすれば、独裁国家として知られるベラルーシとタジキスタンの2カ国だけになった。これ以外のヨーロッパ諸国はすべて死刑を廃止している。OECD加盟37カ国のうち、死刑制度を存置している国は韓国とアメリカ、そして日本の3カ国だが、韓国は（ロシアと同様に）実質的な廃止国であり、アメリカは50州のうち23州で廃止され、3州は執行停止の状況だ。死刑廃止を公約に掲げ

たバイデン大統領が連邦政府の死刑廃止を公約通り実施すると宣言したことは大きなニュースになった。つまり今なお国家として統一して死刑を執行しているOECD加盟国は日本のみだ。

国際人権団体アムネスティ・インターナショナルによると、2020年時点で死刑を廃止、または制度はあっても過去10年間に執行がない事実上の廃止国は144カ国。死刑制度を残す55カ国は、日本を含むアジアとアフリカの一部、そしてイスラム世界に多い。つまり世界のほぼ4分の3は死刑を廃止しており、後進国が多くを占める4分の1が今も死刑制度を維持しているが、日本は極めて例外的な存在だ。

もちろん他国がどうであろうと、正しいと信じるのならこれを曲げる必要はない。でも死刑制度について、僕たちはどの程度を知っているのだろうか。情報はほとんど公開されていない。冤罪や誤判が多いこと、誤って処刑した場合の補償額は最高で3000万円であること、死刑には犯罪抑止効果がほとんどないことなど、あなたは知っているだろうか。

日本国民は今も、8割以上が死刑制度を支持している。理由のひとつは、死刑がなくなれば治安が悪化するとの恐れ。そしてもうひとつの理由は、遺族が持つ応報感情への

共振だ。

もしも死刑制度に犯罪抑止効果があるのなら、死刑を廃止した国の治安は悪化することになる。でもそんな事例はほとんどない。逆に最近では、死刑になることを目的に犯罪を起こす事例が増えている。こう説明すれば、遺族の無念の思いをあなたは無視するのか、と反論される。でも犯罪者にも家族はいます、と僕は答える。遺族の無念の思いを理由に遺族を増やすことに矛盾はないのか。被害者遺族の応報感情を理由にするのなら、被害者に身寄りがない場合には加害者の罰は軽くてよいということになる。ならば命の価値が状況や背景によって変わる。そんな社会が良いはずはない。

ずっと取材し続けた。悩み続けた。死刑を維持すべき理由は今も僕にはわからない。でも廃止しなければいけない理由はわかる。これについてはもう悩まない。

人は無抵抗の人を絶対に殺すべきではない。

クリスマスに処刑された藤波芳夫は、長く車椅子の生活だった。その彼が絞首台に吊るされる光景を想像してほしい。その藤波が残した遺書には、以下の記述があった。

「今日（の処刑）は私一人であってほしいと

願っております」

でも藤波の願いはその後もかなえられていない。2018年にはオウム死刑囚11人が、2回にわたって処刑された。

19人の障害者を無益な命と一方的に断定して殺害した植松聖に対して、多くの人は優生思想だと激しく断罪した。その植松を処刑するとの判決は、面会后すぐに確定した。つまり彼は、生きる価値がないと決めた人を殺した罪で、生きる価値がないと判断されて処刑されるのだ。だから吐息をつきたくなる。ならば死刑制度は優生思想と何が違うのか。

僕は多くの死刑囚と会ってきた。すでに処刑された人もたくさんいる。生きる価値がない。会話しながらそう思った人はひとりもいない。彼らは合法的に殺された。その意味が時おりわからなくなる。確かに人はみな死ぬ。病気や事故や寿命で。でも彼らは死んだのではない。殺されたのだ。それも合法的に。この意味がわからなくなる。

でも僕たちは、そのシステムを下支えする国民のひとりなのだ。

（もり・たつや／作家・映画監督）